

情報化社会における乳幼児の生活指導

齋 藤 貴 子

Guidance of Infants in the Information Society

by

Takako Saitō

1 人類のあゆみと生活指導

人間は、ホモ・サピエンスとしての誕生以来、生きるのに必要な生活の諸技術や方法を仲間、次の世代に伝えることで、今日まで、その文明を育てあげることができた。

しかし、今後も相当長期間生存し続けてその神的創造力を発揮し続けるのか、それとも、ホモ・サピエンス自身の手によって、悠久な宇宙の歴史からすればほんの1コマにすぎないその短い歴史の幕をとじることになるものなのかは、神のみぞ知り得ていることであるが、昨今の状況は、将来に、この危険が色濃く潜んでいることも暗示している¹⁾。

しかし、人類のこれまでの歴史も、創造と崩壊の連鎖であり、この宇宙の本性は、個々の人生の本性ともなっているが、人間の場合、このような本性を秘めつつも、己れや仲間に意味ある生を精一杯創り続けてきたという点においては、他の万物を越えている。

さて、人類が先代の諸産を受けつぎ、さらにそこからまったく新しい生を創造し得た舞台こそ「生活」といえよう。

子どもの遊びの世界と学習の世界、大人の職場での仕事や家庭での育児、物を製作する職人の世界とピアニストのレッスンや演奏活動も、それぞれの人間にとって、その生の全体を包含する世界が、ここでいう「生活」であるにとらえることにしたい。

広辞苑では、「生活」を「①【孟子胡叟伝】生存して活動すること。生きながらえること。くらし。②【北史胡叟伝】世の中でくらし。くらし。くちすぎ。すぎわい。生計。」などとあるが、私はここでは、この「生活」概念を拡大して考えをすすめることにしたい。

一方、「生活指導」について、広辞苑では「児童・生徒の日常生活を直接指導し、望ましい習慣や態度を養うこと。広義には、生活を通して行う教育の全体を指し、狭義には、学習指導に対して用いる。」とあり、「生活」に比べると、「生活指導」の方が歴史的に新しい言葉であることがわかる。

特に、学校教育では、「教科指導の方が、客観的要求としての教材をすべての子どもに身につけさせようとする発想にもとづいて展開されるのに対して、生活指導は、そのような教材を受けとめる子ども側の子ども達の主観的な諸条件、諸事実を理解し、さらにそれを通して子どもたちが本来的に人間としてもっているさまざまな基本的要求を発現させ、家庭、学校、社会における現実の人間関係のなかで、能動的に自己の環境ととりくみ、自己の生活の建設を自己をとりまく

人間関係の改造との相即的關係においておしすすめ、そのような形で、教科で学ばれる知識や技能をも真に身についた学力に転じさせていくという発展を見とおす発想に立って」展開されてきたようなところがある。

しかし、生活指導を、このように教科と対置するかたちではなく、むしろ生活そのものを教えていくことが教育そのものとした学校教育も若干ではあるが我国では行なわれている。

生活すること、生活することを通じて、またそれとの関連において学習することが学校における子どものあるべき姿であるとしたベスタロッチやデュ－イの教育と相通じるような学校教育を行ったところとして、私立の成蹊学園、自由学園、玉川学園などの名をあげることができる。

このように、日本の学校教育では、生活指導が教科指導とは異なる領域として、教科指導とは対置してとり組まれている場合が一方にあって、他方、例数は少ないが、前者のように教科教育とは切り離さないで、教科と統合したかたちでとり組まれている場合とがあるようだ。

幼稚園、保育所、他の児童福祉施設などにおける幼児の生活指導にもこの学校教育における2つの潮流が影響を与えているようなところがあって、幼児教育に学校教育の下部構造としての性格をもたせて、教科的保育とは異った領域の指導として生活指導を行なう場合と生活することそのものが教育であるとして行なわれる保育とがある。

ところで、乳幼児の場合、人間として生きていく上に必要な生活技術、方法は、まだ殆んど身につけていない状態にある。彼らは、大人の援助なしには生存することすら不可能である。

それだけに、かえって、この援助してくれる大人の生きる姿勢や態度や情緒、空間や事物の色彩やかたち材質などの感覚や意匠、動きの所作のリズム、音の感覚など、あらゆるものが技術や方法として、この期特有の驚異的ともいえる感覚の発達の中で吸収されていく。そして、この模倣したものが、その後の人生を形成するのに重要な素材となるのである。

このような乳幼児期の特徴をふまえてみると、この時期の生活指導という領域を他の分野の指導と切り離してとりくむことは不適切であり、しかもすべての諸現象が、他の発達期にいる人間以上に、それなりのし方ではあるが、未分化にとり込まれる状態にあることを考えると、この期の生活指導は、生きていくことに必要な科学的認識や技術も芸術的センスも宗教的感情もすべて包括した教育としてとらえることが妥当であろう。

2 情報化社会の生活の特徴

乳幼児の生活が、大人の生活に大きく影響を受け、その生活指導には必然的に大人が子供に寄せる生への、未来への期待と願望とがこめられることになる。そこで、この現代の社会は、どんな特徴をもつ社会なのか、又、自分はこの中でどんな生を創ろうとしているのかを常に意識していることが、大人側にまずは必要となってくる。

情報化社会といわれる現代は、多くのマス・メディア一中でも、エレクトロニクス（電子工学・電子技術など電子の応用に関する学問ならびに技術の総称）の活躍が目ざましい一によってつくり出される情報が物の生産や販売のし方、消費様式、その他あらゆる社会の分野に以前には予想さえ出来なかったような変化をもたらしている。

この社会の発展の程度を情報化指標で表す方法があって、これによって³⁾①コンピューターや端末機などの普及、利用の度合、②高等教育の普及度、③全産業の中での知識集約型産業の比重、④就業者に占めるホワイトカラーの比重、⑤情報価値上昇などによる商品の多様化、高級化の程度、⑥マス情報から個別情報への移行の度合などの総合判断からすると、日本は、現在のとこ

ろ、アメリカに次いで世界第二位の発展をみせている情報化社会とのことである。

一方、アルビン・トフラーによって、第三の波に洗われている時代と称されたこの時代は、かつてなかった事態が社会のあらゆる領域に生じており、人類、とりわけ日本人にとって、生きることに對する新たな解決能力を發揮することを要求している。^{4),5)}

さて、私達の日常生活は、一見、合理的な豊かさに満ちていて、家事領域でも、肉体を参加させる領域が機械化、電化などによって極度に減少してきている。

核家族化の進行、出生率の減少などとも相まって従来に比べて、時間の過ごし方、時間のもつ意味も変化している。

他方、コンピューター導入以後、生産現場ではロボットが人間以上の生産高をあげ始めており、オフィスでもオートメーション化が確実に進行し、失業者が増大するきざしを示している。

この様相は、あたかもチャップリンが「モダンタイムズ」（1936年製作）の映画を通して風刺した社会状況にも似ており、加えて食物の欠乏、食物や大気の汚染度の進行、軍事競争がもたらした核戦争の脅威など、深刻な人間の自己疎外状況が生まれている。

しかし、後者の状況は、科学・技術の進歩がひき起したものであると批難するだけでは何ら問題は解決されない。言うならば、人間性の尊厳を軽んじた、人間の生き方が引き起こしたものであり、この状況を乗り越えるには、人間性の尊厳に立脚したところの、従来のミクロな科学的手法ではない、むしろ科学と芸術の世界とを統合するような新しいアプローチによって成功するよう思うられる。

科学技術庁と新技術開発事業団が、創造科学技術推進事業として、昭和57年10月から着手した「バイオホロクス」（「全」に対する「個」の素子をギリシャ語でホロン（Holon・全体）と呼び、生物の「全」と「個」との調和関係を対象として展開する科学技術をそう名付けている）という研究主題、研究構想は、これからの人類の目指すべき「新しい途（みち）」は、全体と個、種と個体との関係、間柄を重視し、その調和を図り、「しなやかな」「フレキシブル」なものでなければならないとして、自然現象を、その構成要素の性質を個々に調べることによって理解しようとする従来の「要素科学」から「総合科学」への転換の重要性を強調した研究として注目されている。（1982年、9月27日付 読売新聞）

この構想は、自然科学領域の総合という限界はあるものの、従来の科学的発想を越えた、インターディシプリナリーな、情報化社会に見合った研究構想として注目される。

ところで、最近の1つの傾向として、ユニセックス・ファッションとかユニセックス警察隊などに象徴されているように、従来、男性の世界とされた社会領域への女性の進出があげられる。

しかも、その独自のセンスを生かして、男性以上の仕事の実績をあげている女性も増えているようだ。ファッション界はもとより、デザインの世界、コンピューターのプログラマーとして、又出版界でとその活動舞台が広がっている。⁶⁾

興味あることに、このような女性、あるいは目下社会をリードしている人たちは、その多くが単細胞的な1つの専門領域のみの達人というよりは、多くの領域からの情報を複合的にアレンジして個性ある仕事をすすめているようだ。

この複合化と個性化は、ファッションにも現われているようである。

文化女子大の荻村昭典氏は、現代の若者のおしゃれについて、「最近の若者のおしゃれは、着飾ることから楽しむ方向へと変化してきている。これは、従来の伝統的なファッション感覚から、自由で個性的なファッション感覚への脱出を意味していると言ってよい。制度的な制約や社会的な役割規則を強く受けていた従来の服装観に抵抗して、若者を中心に自由な自己実現を楽しむ

む服装観が生み出された。その底流をなしているのが、ケアレス・ケアの心理である。そして、伝統的な価値観にとらわれることなく（ケアレス）、個性的で自由な自己実現に注意を払う（ケア）心理傾向が現代の若者のファッション感覚の中心をなしている。

しかし、無造作で無とんちゃく（ケアレス）そうに見える若者の服装でも、実際は内部志向性の強い感覚から生み出されている。——中略——彼らは、着飾って人に見せびらかすおしゃれをするというより、心理的満足感を得るために、おしゃれを楽しんでいるのである。

その結果、若者を中心にした現代のファッションは、多様化しており、時には反社会的傾向すら呈することもある。しかし、そこには新しい調和と、個性的な美しさが創りだされつつあることを見逃してはならない。それは、若者たちが、ケアレス・ケアの心理的要求に沿って、貴金属の装飾、高価な布地、手のこんだ刺繡ししゅうなどの伝統的な付加価値とは別に、機能性や心理的満足度を重視したデザインなどから創りだされる高度な新しい付加価値を、ファッションの中に求め始めたからである。これによって、従来の服装観は、現代社会では不適応なものになりつつある。今、服装観は曲がり角にあると言ってよい。……」（1982年、9月20日付、読売新聞）と述べている。

こうしてみると、自然科学・技術の世界にとどまらず、ファッションの世界のような領域にまで、複合化と個性化が浸透しているということがわかる。

以上のようなことから、この情報化社会を特徴づけるなら、多領域の多次元の価値観が互いに複合しあって、従来なかったまったく異った価値観が生み出されていることをまずあげられる。そして、又その創り手も、創り出された価値観も、より個性に富んだものであるということを第2の特徴とすることができる。

3 保育・教育のデザイン化をめざして

社会が大きく変化している中で、教育の領域だけは、不思議にも、伝統的やり方を保ち続けている。

日本では、どこに行っても学校は、建築様式も、カリキュラムも、教材（教科書）や、教員の構成さえもがほぼ同一の価値観にもとづいて構成されている。

教師は、絶対的な権威者として生徒に臨んできたし、それでも、これまでの時代では、社会全体の教育力が貧弱なこともあって、定形のスタイルの公教育でも社会の中に君臨することができた。

しかし、この時代に入って、多くのマス・メディアなどによって、いろいろなスタイルの社会教育が急速に進んだことなどから、従来の伝統的な教育は、現実の社会に適應しない、魅力のないものになりつつある。

教育が、社会を活性化するという本来の力を発揮するためには、多方面の豊富な情報から、本質的に重要な教育課題を選択し、教育対象者の個性、本質に依拠しながら、いわば芸術的にドラマティックに個性をさらに光り輝やくものに育てるといふ、いわばデザイナーのデザインにも似た営みが必要とされている。

ちなみに、このデザインという言葉調べてみると、この言葉は、産業革命以前は、工芸などのいわゆる応用芸術、時たまに、絵画などの純粹美術の分野で、造形方法、構成原理といったような意味に用いられていたにすぎなかったようである。

それが今日では、用法が拡大され、「人間がつくるものでデザインが関与しないものはまった

くない⁷⁾といわれるまでになっている。

川添登氏は、「デザインとは何か」（角川書店）の中で、「デザインのもっとも一般的な用法は、ヒトがつくろうとする目的物を頭に描き、そのイメージをそのまま実現しようとする行為をいう。そのためにヒトは、あるいは図面を引き、模型をつくり、材料の選択から、その製作の過程を通じ、完成され、使用された暁までを、あらかじめ考慮することによって発想する行為をいい、逆にいうならば、人類のイメージの物質的あるいは実体的な実現をこそ、デザインとよぶべき」という。この場合の実体は、氏の表現を借りるなら、観念やエネルギーとは異なる、つまり人間によってつくられ、手を加えられた物質の世界を指している。

この考えを教育の世界に導入して考えると、観念とは、実体でない部分ということであるから、教育の理念や教育に関する理論、知識としてだけの教材などがこれに該当する。エネルギーは、教師の行動力ややる気で、実体は、教師の援助で新しい人間的な力を獲得して新しい自己の世界を切り開いた被教育者そのものということになる。

このように考えると、未知の世界に魅せられ、その本質探求のために自らの手で探求に必要な道具を製作する科学者もデザイナーの仲間と考えることができる。

さて、情報化社会に入って、豊富な情報が容易に手に入り、しかも、従来、人間の手で行なわれていた部分の多くがコンピューターで代行されることになると、当然、その社会が人間に要求する力は、豊富な知識の集積でもないし、伝統的な技のありきたりの活用でもなくなってくる。

人間性の尊厳を重視する方向に社会を発展させていこうとするなら、その時の教育に要求されるのは、コンピューターでは代行不可能な力の育成ということになる。

その1つは、豊富な情報を手がかりにして、個性あふれる自己の人生、生活を具体的に構想する力であろう。次に、具体的場面の中で、事物や人間と対応しながらその構想を創造的に、ドラマティックに現実化する力であろう。さらに又、現実化した実体を通して、事物や他者や自己の活動の本性を読みとりなおし、しかも作り出した実体にこだわらずに、より新しい構想で次の課題に立ち向い続けるような意欲などであろう。

このような力は、従来のようなつめ込み的知識偏重・技術偏重の教育では、培われることは不可能で、教師自身が、まずは複眼的思考ができること、事物や人間の本性を読みとれる力もち、しかも本性に訴える効果的なドラマ的働きかけができる力を備えていることが必要である。いわば、教育が、インターディシプリナリーな科学的・技術的能力と芸術的センスを豊かにもつデザイナーの教師によってとり組まれた時、未来を豊かに切り開く能力を持った子ども達が力強く育っていくことになろう。

4 情報化社会における乳幼児の生活指導のデザイン

このような子ども達を育てることになる生活指導とは、一体どのようなデザインの保育なのか。

保育の対象となる乳幼児は、この段階ではまだきわめて未分化な状態の世界にいる存在である。だが、他の時期にいる人間に比べて彼らは、あたかも、全身が感覚器官になっているかのごとく、驚異的な力で、全世界のすべてを吸収していくようなところがある。

このような世界に存在する彼らの現代を未来を生きる力を育てようとするなら、まずは、彼らをつつみ込んでいる現代という時代性を個々の具体的な生活場面を通して、リアルな感覚と意識でキャッチしておく必要がある。両者の融合された世界—換言するなら超感覚的世界—は、あた

かもコンピューターによる複合世界にも似ているが、しかし、その世界は、科学・技術と芸術との複合された世界であれば、それは、コンピューター以上の世界である。そのような超感覚によって把握された現実、把握者の個性を反映した、実に個性豊かな現実となる。その現実を通して、保育者は、自らの人生目標と、その此岸に、保育（生活指導）の目標も設定することになる。

さらにまた、保育者が、この複眼的超感覚で、すでに子どもに形成されはじめている個性の本質をも深く把握することで、子どもの生活指導的的は、より具体性をおび、そして、それはまた、保育者の人生構想の中にもくみ込まれることになる。

こうして、生活指導の構想が明確になると、保育者は、生活の具体的なあらゆる場面を、子どもの力にも依拠しつつ、瞬時的に、互いの世界の創造の場に構築していくことになる。

その軌跡は、ドラマであり、あるトーンをもった音楽的リズムの世界ともなり、民族的な技術を習得し、かつ創造する世界ともなる。

例えば、ある保育者が、目の前の子どもの世界に、素直な素朴さとやわらかいトーンの個性を見出す。

この保育者（女性としておこう）は、この子にこの時代、未来を生きる力が育ってほしいと願っているとする。

彼女は、あらゆる世界に対して、心おどる興味がこの子の中に育ってほしいと、ある時、子どもとともに自然の中に入れ入り、あたかもミレーやルノアールやモネの世界を探索するかのごとく、光や風や花々にあふれた大自然の中に身を横たえる。明るい光と、さわやかな風が花々をつつみ、虫たちの活動もさかんである。こんな中で、美しいトーンの音楽のイメージが1つの色彩をもって溢れ出てくる。彼女は、それを口ずさむ。子どもは、それら全体を、まるで絵を見ているかのごとく、美しい体験として味わっている。

同じ保育者が、ある時近代的な工場で働いている子どもの父親を訪問する用事ができた。彼女は、子どもを連れて工場へ行く。彼女は以前から、子どもに父親の工場を見せたいと考えていたからだ。

大きな、近代的な機械。たくさんの男の人や女の人が、自由な服装で、生き生きと動きまわっている。こんな世界を見たことがなかった子どもは、目をまるくして、興味深げにあたりを見ている。子どもの目は、1つの機械に集中した。どうやらこの形が大いに気に入っているらしい。帰ったらこんなものを粘土でつくれないかななどと一人言を言っている。訪問から帰ったあと数日間、子どもは機械遊びに熱中している。

こんなふうに、生活のあらゆる場面が、あらゆる瞬間が、子ども（乳幼児）にとっては科学・技術と芸術との統合した創造の場になり得る。

しかも、彼らには、大人のように旧いシステム体系が存在しているわけでもないので、新しい時代性を直観的に感じ自分のものにしていく力は、大人よりもすぐれている。

ともあれ、保育者が、子どもとかかわりながら、瞬時的に、あるいはあとで、子どもと自分とのかかわり合いの全体を点検することが必要になってくる。

もし、この作業を、従来の科学で行なっていたような、構想の時点そのままのセンスで行なうのではなく、まったく異った発想と方法とで行なうなら、その保育者は、自分の軌跡の中から、多くの真理を発見でき、又、生活をゆたかに創造していくことが、未来を主体的に開いていく子どもを送り出すことができよう。

＜参考文献・資料＞

- 1) レスリー・ワトキンス, ディビッド・アンブローズ, クリストファー・マイルズ 共著 梶野修平 訳
「第3の選択」, たま出版, 1981
- 2) 「世界大百科事典」, 平凡社, 1966
- 3) 「現代用語の基礎知識」, 自由国民社, 1982
- 4) アルピン・トフラー著 徳山二郎他 訳, 「第三の波」, 日本放送出版協会, 1981
- 5) 「第三の波」, NHK, 1982, 5
- 6) 「出版界最前線—ベストセラーをねらえ—」②, NHK, 1982. 11
- 7) 川添登, 「デザインとは何か」, 角川出版, 1974